

ランボーが読んだボードレー

— 「見者の手紙」以降の詩の読解のために—

三好美千代

始めに

1871年5月13日恩師ジョルジュ・イザンバール Georges Izambard 宛て、5月15日その友人で詩人でもあるポール・デムニー Paul Demeny 宛ての二通の「見者の手紙」で、ランボーは自分の詩論によって、当時の文壇に対し、全面的な対決姿勢を明らかにする。何がランボーにそうさせたかを即断するのは難しいが、少なくとも、ランボーの変化の過程をテキストの中に辿ることはできるように思われる。ただ、ランボーの言葉は、若者特有の性急さがあり、説明性に欠けている。どう解釈すればよいのか、どこからそうした発想が出てくるのか、明確な論理があつての発言なのか、単なる大言壮語なのか。しかし、ランボーの思考は様々な外部からの刺激、つまり、文学的状況、普仏戦争やパリコミューンなどの政治的状況、家族や交友関係、その他もろもろの要素から形づくられている。そして、特に、当時の文学的状況を背景にして、ランボーの目にふれた書物は、彼が詩の中で用いた用語にそれが反映され、読解の助けになる可能性をはらんでいる。ところで、「見者の手紙」にプラトンの考え方が見られることは多くの研究者が指摘している。けれども、手紙に添えられた《刑罰に処せられた心臓》にプラトンの『国家』のモチーフが隠されていたことには気がつかなかつた⁽¹⁾。これは方法の問題だと思われる。

さて、1985年に Yves Reboul が《正義の人 L'homme juste》の解釈を行っており⁽²⁾、用語に注目するアプローチの方法は、筆者と同様なものであるように

思われる。Yves Reboul は《正義の人》がキリストのことではなく Vicor Hugo のことを語っているということを明らかにした。ランボーはパリコミューンの最中、ベルギーにいたユゴーに失望し、ユゴーが詩の中で用いた言葉の引用を行いながら、老年のユゴーの無力さをなじり、自分は呪われ人だとして非常に攻撃的な議論を展開している。明確に一人の詩人に向けて、ランボーがこうした詩を書いたということは、ランボーの他の詩に、そうした傾向のものがある可能性も示唆している。問題がすべて解決するとは言えないが、他の詩人の用いた用語の転用をランボーの詩の中に探すという方法で、納得のいく解釈に至ったと思われる個所があり、不可解な個所での有効性はあるように思われる。

さて、見者ではあるけれども「それでも、芸術的過ぎる環境で生きた」とされるボードレールはどうであろうか。ボードレールの『悪の花』を検討した結果、二つの詩がボードレールの『悪の花』を読んだ痕跡を残していた。ここで痕跡というのは、『悪の花』の中にあるいくつかの詩のモチーフないし用語がランボーの詩の中に読み取れたということである。ボードレールの『悪の花』は、テムニー宛ての「見者の手紙」に添えられた《僕の可愛い恋人たち》、少し下って、当時、高踏派を率い『現代高踏派詩集』を刊行していたテオドール・ド・バンヴィル宛て7月14日の手紙に添えられた《花について詩人に語られたこと》の中に読み取れる。だが、まずはイザンバルの手紙に添えられた《刑罰に処せられた心臓》にボードレールの考えからの転用が見られるのではないかということから始めよう。

《刑罰に処せられた心臓》

《刑罰に処せられた心臓 *Cœur supplicié*》は、当時の文壇あるいは周囲の人間を、同じ船に乗った人々として、その中で彼らの考えに本当の心を盗まれ、彼らがこだわる詩の技巧が枯渇したなら、それに従って詩を書いてきた⁽³⁾僕はどうすればよいのだらうと、訴えかけた詩と解釈出来る。舞台設定が船上であ

ること⁽⁴⁾、また三つのヴァリエーションにおける《刑罰に処せられた心臓》(イザンバール宛)《道化者の心臓 Cœur du pitre》(デムニー宛)《盗まれた心臓 Cœur volé》(ヴェルレーヌ宛)という、一見脈絡がなく不思議に思われるタイトルの変更が、プラトンの『国家』の中に書かれている譬えで何れも正しい考えを持つことを阻まれた心であることなどから⁽⁵⁾、大筋で『国家』との関わりが想定されたが、トリオレ形式で書かれたこの詩の第三連で用いられている「chique」という言葉と、ボードレールが『1846年のサロン』の中で書いている《シックとポンシフ Du chic et du poncif》と題されたテキストとの間に関わりがないだろうかという問題が立ち現れた。1868年の Michel Lévy 版ボードレール全集に、このテキストが収録されていることから、ランボーの目に触れたことは充分考えられる。ランボーのテキストでは以下のように書かれている。

Quand ils auront tari leurs chiques,	彼らがその技を涸らせたら、
Comment agir, ô cœur volé!	どうしよう、おお、盗まれた心臓よ!

この詩で、「彼ら」は最初から代名詞で、どういった人々かは明確にされていない。いずれにしても「chique」を所有している者たちで、将来それを「枯渇させる tarir」人たちである。他方、ボードレールのテキストでは以下のように書かれている。

Le chic, mot affreux et bizarre et de moderne fabrique, dont j'ignore même l'orthographe, mais que je suis obligé d'employer, parce qu'il est consacré par les artistes pour exprimer une monstruosité moderne, signifie: absence de modèle et de nature. Le chic est l'abus de la mémoire; encore le chic est-il plutôt une mémoire de la main qu'une mémoire du cerveau; car il est des artistes doués d'une mémoire profonde des caractères et des formes, — Delacroix ou Daumier, — et qui n'ont rien à démêler avec le chic.⁽⁶⁾

下線部(筆者)については「H. de Balzac a écrit quelque part : le chique.」との注が付されている。これを見る限り、「chic」は良い意味では用いられていな

い。ランボーが、ボードレールの「chic」を脚韻の都合あるいは掛詞の都合から「chique」と綴り変えて用いたと考えるとこの詩の二連目にある「夕暮れ時に彼らはフレスコ画を描く *A la vesprée, ils font des fresques*」という表現との整合性が出てくる。彼らが枯らせるのは「フレスコ画」を描くための「chique=chic（小手先の）技巧」なのである。また、一連目にある「僕の心臓はカポラルで一杯だ *mon cœur est plein de caporal*」の「caporal」という用語が「伍長」の意味から、兵隊の吸う「安たばこ」をも表すことになるのだが⁽⁷⁾ それに対する彼らの「たばこ」の意味をもあわせ持つ言葉遊びにもなったのではないだろうか。パリに出たランボーが関わった文学サークルの落書き帳『アルバム・ジュティック』には、ランボーの手になる詩がいくつか書き付けられている。その中に「僕は三等列車に座って」に始まる詩があり、パイプに詰めるための「一つまみのたばこ *une chique de caporal*」を所望する年老いた聖職者が登場する。「彼ら」が枯渇させるものは才能でも靈感でもなく「フレスコ画」を描くための「（小手先の）技巧」であり、また、僕の心臓を一杯にしている「安たばこ *caporal*」でもあると考えられないだろうか。僕の心臓は「chique=chic」をつまみ出すの貯蔵庫という可能性も考えられる。少なくとも、「chique=chic」という図式は十分に考えられ、絵画の比喻で同時代の詩人たちを批判したと考えるのも良いのではないだろうか。ランボーの「chique」に、ボードレールが関わっていると考えれば、この詩は比喻を用いた論理的内容を持つものとなる。

《僕の可愛い恋人たち》（1）

《僕の可愛い恋人たち》はデムニー宛てに書かれた「見者の手紙」に添えられた。デムニー宛ての手紙が内容的にはイザンパル宛ての手紙を発展させたものであることから、そこに添えられた三篇の詩の中に《刑罰に処せられた心臓》同様に、詩あるいは詩人たちに関わる何らかのコメントを含んだものがあると

考えても良いように思われる。《僕の可愛い恋人たち》は、詩人は見者になって未知なるものに到達しなければならぬという議論をした後、「ここで、僕は本文外の二番目の詩篇を挿入します。どうぞ寛大にお耳をお貸してください。——すると、誰もが魅了されることでしょう。——僕は弓を手にし、弾き始めます。」と書いたあとこの詩が挿入される。「詩篇 psalme」は旧約聖書に収められた神を称えるためのもので、教会で歌われたり、祈りに用いられたりする。詩の内容から考えると非常にアイロニカルな言葉で、この詩は「詩篇」とは逆に神に祈ることを良しとしていない。ちなみに、ボードレールはこの詩同様の八音綴詩句をいくつか書いている。

Un hydrolat lacrymal lave	涙の蒸留水が洗う
Les cieux vert-chou:	キャベツ色の空を
Sous l'arbre tendronnier qui bave,	涎をたらす若木の下で
Vos caoutchoucs	おまえ達のゴムは
Blancs de lunes particulières	丸い涙を流す
Aux pialats ronds,	奇妙な月で白い
Entrechoquez vos genouillères,	膝当てを打ち合わせろ
Mes laiderons!	僕の醜い娘たちよ!

まず、一連目であるが、涙の蒸留水すなわち雨がキャベツ色の空を洗い上げる。「涙の lacrymal」は神々の涙が雨であるというギリシャ神話的の比喩、「蒸留水 hydrolat」は水蒸気が雲となり雨となることから自然を大きな蒸留器とみなした比喩と考えられる。キャベツ色は《七歳の詩人たち》で日曜ごとに読まされる聖書の小口の色。聖書的な意味合いのある雨であろうか。ここでボードレールとの関わりの可能性を想定出来るのは「l'arbre tendronnier qui bave,」と書かれている部分である。『悪の花』の最初の詩《祝福》には詩人を生んだ母親が子供を呪って「この哀れな木をしっかりと捻じ曲げてやろう/ 悪臭のする新芽が出てこないうちに Et je tordrai si bien cet arbre misérable, / Qu'il ne

pourra pousser ses boutons empestés!』と言っている個所がある。詩人に生まれついた子供を木に例えているわけで、この比喩がランボーの「誕をたらず＝詩を書く baver」木に繋がったのではないだろうか。そしてこの木は《刑罰に処せられた心臓》の中で詩を書く「僕の哀れな心臓」と同様、「他者」としての詩人と考えて良いように思われる。「僕の醜い娘たち」と言われている娘たちはそうだと「若い娘を生む木 l'arbre tendronnier」が生んだ「若い娘 tendron」が実は「醜い娘 laidron」だったのだろうか。彼女たちは詩のテーマ、詩想のようなものかもしれないし、あるいは、《刑罰に処せられた心臓》に出てくる「彼ら」と同じに詩人たちなのかもしれない。

「ゴム caoutchouc」は《花について詩人に語られたこと》で 次のように書かれている。

Commerçant! colon! médium!	商人よ！ 植民者よ！ 靈媒よ！
Ta Rime sourdra, rose ou blanche,	お前の脚韻は、薔薇色に、あるいは白く、
Comme un rayon de sodium,	ナトリウム光線のように、
Comme un caoutchouc qui s'épanche!	しみ出てくるゴムのように湧き出てくるだろう。

シェークスピアは『アテネのタイモン Timon of Athens』のなかで、詩人に「我々の詩はゴムのようなものひとりでに育ってしみ出るのです... Our poesy is as a gum, which oozes / From whence 'tis nourish'd... 」と語らせている。シェークスピアはロマン派の詩人たちに大きな影響を与えている。この比喩を何らかの形でランボーは知っていたのだろうか。脚韻の比喩として「ゴム caoutchouc」が用いられている。白は無垢の象徴と考えて良いだろうか。ちなみに「caoutchouc」は「gomme」よりも新しい言葉で、ゴムが作られる国の言葉からフランスに入ってきたもので 19 世紀初頭から広く使われるようになったそうである。《僕の可愛い恋人たち》でもこれを脚韻の比喩と考えることは可能であろう。「丸い涙を流す奇妙な月」の「涙 pialat」（「hidrolat」にあわせてたのであろう）は「痰、唾 crachat」が「(痰、唾などを) 吐き捨てる cracher」

という動詞から出来ているように、「pialer」という動詞が想定出来るが、この動詞は辞書にはない。「(鳥や子供が) びいびい泣く pialler」の方言ではないかと言われている。「涙」についてはボードレールが《月の悲しみ》の中で地上に流す一粒の月の涙がある。

Quand parfois sur ce globe, en sa langueur oisive,	時としてこの地上に無為にふさぎ
Elle laisse filer une larme furtive,	彼女(月)が密やかな涙の雫を落とすと
Un poète pieux, ennemi du sommeil,	眠りを嫌う一人の敬虔な詩人が、
Dans le creux de sa main prend cette larme pâle,	オパール欠片のように虹色に輝く
Aux reflets irisés comme un fragment d'opale,	青白いこの涙を手の程みにうけ、
Et la met dans son cœur loin des yeux du soleil.	太陽の目からは遠い彼の心の中にする。

ランボーの「pialat」を月の流す涙であるとすれば、月は擬人化され、女性の比喩ともなり、一つしかないはずの月の複数形が納得いくものになる。

なぜ「膝当て *genouillère*」をしているかを考えると、これは常に跪いて神に祈るので必要となってくるのではという解釈が出来るのではないだろうか。ユゴーの詩は敬虔なカトリック教徒のもので、常に神に祈っている。またボードレールの《祝福》も神が詩人を庇護する。いずれにしてもフランスはカトリックの国であり、神に祈る詩人たちの詩想はやはり敬虔なものであろうから、膝をつけて祈るため、その膝を保護する「膝当て」をしていておかしくない。ちなみに、序文で挙げた《正義の人》の中では「それで、おまえは膝当てを売りに出すというのかい。おお、老人よ！...Alors, mettrait-tu tes *genouillères* en vente, Ô *vieillard!*...」と「膝当て」という言葉が出てきており、Yves Reboul はそれを、ユゴーがコミュニンの人々を諷めた《報復はやめよ》に「許しを請うために膝をすり減らすだろう/彼らが我々に投げつけたものを彼らに返すならば *A demander pardon j'userais mes genoux / Si je versais sur eux ce qu'ils jettent sur nous.*」とあることによるとしている。⁽⁸⁾ともかく、ユゴーの詩には跪いて神に祈る場面が多い。また、Grand Robert の辞典には「*entrechoquer*」の比喩的な使

用例として「彼はその手の中で非常に力強く、そのとき鳴り響いているあらゆる考えをぶつかり合わせた Il **entrechoquait** si puissamment dans sa main toutes les idées sonores du moment (Hugo.Littérature et philosophie mêlées, Mirabeau,II)」とあり、ランボーの奇妙な動詞選択を、神にそむかぬ敬虔な様々な思考をぶつかり合わせる比喻と捕らえれば、物理的に捕らえた場合の不可解さが和らぐ。こう考えていくと醜い娘たちは当時の詩人たちを言っているとも思われてくる。

《僕の可愛い恋人たち》(2)

《僕の可愛い恋人たち》には最後の個所にもボードレールの助けによって、一つの解釈が可能となる部分がある。

Fade amas d'étoiles ratées,	失敗した星たちの精彩のない山よ！
Comblez les coins!	角を埋めよ！
Vous crèverez en Dieu, Bâtées	神を信じてくたばってしまえ！
D'ignobles soins!	おぞましい気配りを背負って。
Sous les lunes particulières	丸い涙を流す
Aux pialats ronds,	奇妙な月の下で、
Entrechoquez vos genouillères,	膝当てをぶつけ合わせろ！
Mes laiderons	僕の醜い娘たちよ！

ここに示したのは最後の個所である。「失敗したキャンパス画の精彩のない山 Fade amas des toiles ratées」と書くべきところを「Fade amas d'étoiles ratées」と読み替えている。《刑罰に処せられた心臓》で「フレスコ画」が「彼ら」の描く絵であった。ここでは「キャンパス画」が出てくることになる。「étoile」と「toile」が脚韻として、ボードレールの《妄執 Obsession》で用いられていることは注目に値するだろう。詩の中で、星の光は静寂を与えてくれない。

Comme tu me plairais, ô nuit! sans ces étoiles	どれほどお前を気に入るか。ああ夜よ!
Dont la lumière parle un langage connu!	その光が月並みな言葉を話す星さえなければ!
Car je cherche le vide, et le noir, et le nu!	なぜなら、私は空虚、暗黒、赤裸を求めている のだから。
Mais les ténèbres sont elles-mêmes des toiles	だが、暗闇すら画布となる
Où vivent, jaillissant de mon œil par milliers,	そこでは私の目から幾千となくほとぼしりである
Des êtres disparus aux regards familiers.	親しい眼差しの消え去った物達がうごめく。

もちろん、この脚韻はロマン派の常套的なもので、ユゴーの詩でも用いられるが、ボードレールが詩を絵画に引き寄せている点でランボーの絵画の比喩と結びついたのでないだろうかと思われる。また、《亡霊 1 暗闇 Un Fantôme I Les ténèbres》では、詩人は神によって、暗闇という「キャンバス」に画を描かされている。

Je suis comme un peintre qu'un Dieu moqueur	私は愚弄する神によって、哀れ、暗闇の上に
Condamné à peindre, hélas! sur les ténèbres,.	描くことを強いられた画家のようだ。 .

ランボーはそれを受けて「お前たち (étoiles 乃至 toiles) はおぞましい心配りを背負って神を信じて死んでしまえ。」と言ったのではないだろうか。「crever」という動詞は「見者の手紙」でユゴーに言及して「廃れてしまった大仰さ *vieilles énormités crevées*」が多すぎるとしている。「堆積した失敗作」の詩群は、今までの詩を批判する「手紙」の内容に合致する。

《花について詩人に語られたこと》(1)

1871年7月14日付けで、当時高踏派のリーダーであったテオドール・ド・バンヴィルに送られた《花について詩人に語られたこと》の中で、次のような個所がある。花を歌う詩人に挑発的に悪態をついている詩で、ランボーの攻撃性が顕著に表れている。

Vieilles verdure, vieux galon !	古くさい草木、古くさい飾り紐よ！
Ô croquignoles végétales !	おお、植物のクラッカーよ！
Fleurs fantasques des vieux Salons!	昔の展覧会の風変わりな花々よ！
— Aux hannetons, pas aux crotales,	—こがねむしには合うが、がらがら蛇には似合わぬ、
Ces poupards végétaux en pleurs	この泣きじゃくる丸々とした植物たちを
Que Grandville eût mis aux lisières	グランヴィルなら手引き紐につないだらう、
Et qu'allaitèrent de couleurs	そして面頬をつけたつまらぬ星たちが
De méchants astres à visières!	色で養ったのだ。

グランヴィルの花を擬人化した挿絵は 1847 年に出版されている。しかし、「面頬（＝まぶた）をつけたつまらぬ星たち」は何を比喻しているのだろうか。この「星たち *astres*」は、ボードレールが《生ある松明》で「私（詩人）の魂の目覚めを謳いあげつつ *en chantant le réveil de mon âme*」歩き、詩人を「美の街道 *la route de beau*」へ導く「いかなる太陽もその炎を褪せさせることの出来ない星たち *Astres dont nul soleil ne peut flétrir la flamme*」すなわち女性の目とすることで、了解可能となる。「面頬 *visières*」は兜の前についた上げ下ろしの出来る部分のことを言う。《座り込んだ奴ら》の中で、「目蓋」の意味で用いられているのでここでも同様であろう。「星たち *astres*」に「目蓋」があることで「美の街道」へ導くという「星たち」の絶対性は失われる。また「色で養った」は《陽気すぎる女へ》の中で「衣装に響き豊かな色を撒き散らし、詩人達の心に花の踊りの印象を投げ与える *Les retentissantes couleurs / dont tu parsèmes tes toilettes / jettent dans l'esprit des poètes / l'image d'un ballet de fleurs*」「けばけばしい色を取り混ぜた精神 *ton esprit bariolé*」の持ち主を考えると一応の納得はいく。1857 年『悪の花』第一版がランボーの目に触れたとするなら、《生ある松明》の次に位置するこの詩が「色で養った」という表現をさせた理由となる。

《花について詩人に語られたこと》(2)

以上見てきたように、ランボーはボードレールを相当丁寧に読んでいた。バンヴィルが出版した『現代高踏派詩集』の一号にはボードレールの詩が掲載されていたし、バンヴィルは友人であったボードレールの『悪の花』第3版の編集を行っている。そう考えていくと《花について詩人に語られたこと》に「取り分け、ジャガイモの病についての解釈の詩を作れ！ Surtout, rime une version / Sur le mal des pommes de terre！」と呼びかける個所はそのことを知った上で『悪の花 Les Fleurs du Mal』のことを仄めかしているのではないかと思われる。バンヴィルは『鍾乳石 Les Stalactites』の中で《シャルル・ボードレールへ》(1845年)という十行ほどの短い詩を書いている。

O poète, il le faut, honorons la Matière ;
 Mais ne l'honorons point d'une amitié grossière,
 Et gardons d'offenser, pour des plaisirs trop courts,
 L'Amour qui se souvient, et se venge toujours.
 Notre âme est trop souvent comme cette Bacchante
 Que, dans une attitude aimable et provocante,
 Le Satyre caresse et retient dans ses bras,
 Rouge de ses désirs et de son embarras,
 La tête renversée et les lèvres mi-closes.—
 Et que l'enfant Amour châtie avec des roses.
 Mars 1845.

おお詩人よ、確かに題材を称えるべきだ。
 だが、粗雑な友情からそうしないでおう。
 束の間の快楽のために傷つけずにおこう、
 忘れず、必ず復讐をする愛を。
 僕らの魂はあのバッカスの信女になり易い
 サチュロスがやさしく挑発的な身振り
 で愛撫し、その腕に抱くと言う。
 欲望と困惑で顔を赤らめ、
 頭を反らし、唇を半ば閉じた彼女を一
 キュービットが薔薇で懲らしめると言う。

1845年3月⁹⁾

快楽に感溺することはよくないと語りかけているこの詩は『悪の花』第3版(1868年)に付け加えられた《テオドール・ド・バンヴィルへ—1842年—》(1845年にバンヴィルへの手紙に添えられた原稿だそうである)に答えてのものだったといわれている。⁽¹⁰⁾「じゃがいもの病」はこの詩が、『悪の花』の「解釈 version」をしたとランボーに理解されたための皮肉ではなかっただろうか。花の病ではなく、実利的なじゃがいもの病を語れということになるのだが。

終わりに

「見者の手紙」でランボーは、過去の詩を「全ては韻を踏んだ散文、遊びごと、数え切れない愚かな世代の衰退と栄光である」と言った。韻律を遊びごとというこの書き出しには、プラトンの『国家』の考え方がある。ランボーはプラトンの考えに大きく傾いた。詩が正しい思想を表現し得るためには韻律に頼ってはいはだめだ。韻律の美しさは物自体を語る妨げとなる。これがボードレールの『悪の花』をも否定させることになった。ボードレールより先に、韻文詩の可能性はあるのだろうか。我々に取って過ぎ去った文学史はランボーに取ってはリアルタイムである。ボードレールが亡くなったのは1867年。『悪の花』の3版が出たのが1868年である。ランボーに最後の韻文詩の可能性を見せたのはボードレールであった。そして、ボードレールが最初の見者であった。けれども、「とはいっても、彼はあまりにも芸術的すぎる環境で生きました。そして、彼の誉めそやされる表現形式はけち臭いものです。未知なるものを生み出すには新しい表現形式が必要です。」とランボーは語っている。バンヴィルが絶対視した脚韻。ボードレールの散文詩は、この時ランボーの念頭にはなかったものであろうか。『パリの憂鬱』は1869年に刊行されているが、まだそれを詩と意識して評価する土壌は出来ていなかったと考えた方が良いでしょう。ともあれ、ランボーはボードレールが使った言葉を揶揄するような形で自分の詩に取り込んでいる。少なくとも『悪の花』がある意味でランボーの内面に深く訴えかけたことを明かしているのである。ベルトランに始まり、ボードレール、ランボー、ロートレアモンへと受け継がれる散文詩。ランボーがそこに参入するまでの道筋の始まりがここにある。少なくとも「未知なるもの」はボードレールから示唆された。《旅》の中でボードレールは言う。「未知なるものの奥に新しいものを見つけるのだ！」そして、「新しい形式」を求めてランボーの探求が始まるのである。

(注)

- (1) 筆者拙稿「ランボーとプラトニズム」『詩論』15号 詩論社、1993
- (2) « Parade Sauvage » 誌 No.2 A propos de « l'homme juste » Musée-Bibliothèque Rimbaud, 1985
- (3) baver という動詞が漏れ出るという意味から、心を外に漏れでさせる、あるいは詩を書くことに転用されていると思われる。Baver 3.(en parlant d'un liquide : encre, colle) Se reprendre au delà des limites voulus.(Logos)
- (4) 『国家』488-489 (ステファヌス版のページ数による。以下同様) プラトン著、藤沢令夫訳、岩波書店、1976 (船上で本物の舵取りはなかなか認められず、正しい舵取りをしないものが、支配権を握る譬えて国家の現状を語っている。)
- (5) 『国家』第六巻 492d (多数者の集会において、彼らの意見に従わぬものが処罰されることが述べられている。) 606c,d (喜劇を喜び、模倣することは、実生活においても喜劇役者に成り果てることで、詩作においての模倣もそれと同様だと述べられている。) 413 (人々が意に反して真実の考えを取り去られるのは、盗まれてか、たぶらかされてか、強いられてかのいずれかであると述べられている。)
- (6) « Baudelaire, œuvres complètes » texte établi et annoté par Y.-G. LE DANTEC, édition révisée, complétée et présentée par CLAUD PICHOS, GALLIMARD, 1961, p.925
- (7) 「caporal」はまた「Sous les quolibets de la troupe / qui lance un rire général」とある部分の「général」との言葉遊びともなっている。
- (8) 注(2) p.49
- (9) « Œuvres poétiques complètes de Théodore de Banville » textes électroniques interactifs Mount Allison University, Sackville, N.B., Peter Edwards (ed), 1996
- (10) 『ボードレール全集 I 悪の花』阿部良雄訳、筑摩書房、1983. p.634

(その他の参考文献)

- « Rimbaud, Poésies » Préface, notices et notes par Jean-Luc Steinmetz: Flammarion 1989
- « ARTHUR RIMBAUD, ŒUVRES COMPLETES, CORRESPONDANCE » Edition présentée et établie par Luis FORESTIER: Robert Laffont 1992
- « LE PARNASSE CONTEMPORAIN (I) 1866 » SLATKINE REPRINTS, 1971
- « Arthur Rimbaud, ŒUVRE-VIE » Edition du centenaire établie par Alain Borer avec la collaboration d'André Montègre: Arléa 1991 p.1055

*本論は過去に行った議論をボードレールという視点から、整理し直したものである。『星とランボー』年報フランス研究第27号、『ランボー:《僕の可愛い恋人たち》解説に向けて』同28号、『《座り込んだ奴ら》のポエジー』同29号において関連した議論を行っている。

(文学部非常勤講師)